

蒔田明史さん 祇園祭ちまきの危機 ササの研究からわかること

秋田県立大学 生物資源科学部 教授 (高26 昭和49年卒) 4組



京都のど真ん中、四条烏丸で祇園囃子を聞いて育ち、自然とは全く縁もゆかりもないはずだったのが、なぜか植物研究の世界へ。なぜその研究を始めたのか、またそこから何がわかるのかをインタビューしました。



高校ではバスケット三昧の日々、理系の学力ではなかったのに

堀高時代はほぼバスケット漬けの日々を過ごしました。そんなに強くはなかったけど、最後の大会で府のベスト4まで勝ち上がり涙するという青春真っ只中という生活を送ります。インタビューの日もバスケットクラブの仲間達と食事をする約束をされていました。バスケットは大学でも続け、今でも研究よりバスケットの方が自信があると自負されています。堀高の自由な校風も楽しみ、後々の研究姿勢にもそれが反映されていると言います。数学が苦手な理系とはいえなかったのですが、大阪郊外にあった祖父母の家に行くたびに自然に触れていたという蒔田さんは生物の研究をしたくて京都大学に入学します。

ササの研究にのめり込む 卒業後は文化庁天然記念物担当の調査官に

京都大学ではササの研究に没頭します。ササは100年以上の周期で突然花を咲かせます。そして一斉に枯れ、多くの種子を付け20年以上の年月を経て元の姿に戻っていきます。実はササがびっしり生えている間は木々のタネが落ちても生育できません。ササに被われて地表が暗いので、芽生えてもすぐに枯れてしまうのです。しかし、ササが枯れてしまった後は芽生えに光があたり、大きく育つことが可能になります。森の木々にとってはその時期がチャンスなのです。ササが回復するまでに間に子孫(若木)を育てていきます。こうやって森は世代を交代させ長いサイクルで相を変えていくのです。この気の遠くなるような長いサイクルや仕組みを追いかけ、観察し研究する日々を過ごしたのです。大学院卒業後東京に移り、文化庁の天然記念物(植物)担当の調査官になります。樹齢何百年という大木や、珍しい花などをもとめ、調査し、報告し日本全国津々浦々までを行脚しました。京大での研究が深掘りなら、こちらは横に大きく広く知見を広げることになります。この時の数多くの出会いが人間の幅を広げてくれました。また、研究者として物事を総合的に俯瞰できるようになりました。



秋田の森で見えてくること

そして調査官として秋田を訪れたときに、運命的な出来事が起こります。たまたま移動中の車中のラジオで新設される秋田県立大学の教員を募集していることを聞いたのです。秋田県立大学は平成11年に開設された新しい大学で多くの人材を求めているのです。蒔田さんは、これに応募し、この大学の教授となったのです。再び研究のフィールドに戻って、秋田でもササきます。もうこれ以上の研究は難しいかなと思うと、例えばDNA解析の技術が発達してきて、ササの個体を判別することができるようになり、ササ同士の関係や系列を追うことが可能となりました。研究が進めば進むほど、新たな謎や研究方法が見つかり興味が尽きないとのことでした。



の研究を再開し続けてい

地域の人々とともに

研究の一方、蒔田さんの研究室では地域の人たちとの結びつきを大切にしています。その例の一つが、月に一度のペースで開いている「森林科学セミナー」という公開セミナーです。自然や地域に関係する様々な講師を招き、熱心に大学を訪れる一般の人たちと共に自然について考える時間を共有しています。2000年に始めて、もう120回以上続いているとのこと。熱心に通ってくれる人々や無償で快く講師を引き受けてくれる方々に支えられていると言います。



そして、もう一つが「炭やき」の活動です。秋田県立大学は海岸のマツ林に取り囲まれた大学です。ところが10数年ほど前から、秋田県では、カミキリムシが媒介する病気でマツがどんどんと枯れていく、いわゆる「マツ枯れ病」が蔓延しはじめました。この被害を食い止めるために、北国でのマツ枯れ病のメカニズムを解明すると共に、実践的な防除活動として、枯れたマツを炭にして有効利用するという炭やきが始まったのです。「全国に大学はたくさ



んあるけれど、こんな大きな炭窯を二つも持っている大学はないんじゃないでしょうか」と蒔田さんは言っています。そして、この活動の成果で、秋田県立大学の周りはきれいな松林が維持されています。こうした活動のもとには、地域の人たちと一緒に自然を観察し、自然とどう向き合っていくのかを探索することこそが地域の大学としての意義だとの考えがあるのです。

しなやかに、したたかに。

長い間北国の植物を観察してきて、「雪国の植物は、しなやかに、したたかに生きている」と蒔田さんは感じているそうです。体を硬くして降り積もる雪に抵抗しようとする、重さに耐えかねてポキッと折れてしまいます。でも雪国の植物はそうではないのです。とても柔軟で、低木やササなどは降り積もる雪に身を任せて、雪に埋もれて冬を過ごすのです。雪って冷たそうに思いますが、実は雪の中はそんなに厳しい環境ではありません。秋田の冬の行事”かまくら”を思い浮かべてもらえばいいと思いますが、雪は温度を通さないし冷たい風も当たらないので安全に冬越しできるのだそうです。そして、春が来て雪が溶けると、再び起き上がって春の光を浴びていち早く光合成を始めるのです。多雪という厳しい環境をしなやかにやり過ごして、逆にその環境を上手に利用して生きているのが北国の植物なんだそうです。もしかすると、東北の人たちの性格にもこうした面が反映しているのかもしれない。

近年、蒔田さんは故郷の京都でもフィールドワークを行われています。京都北山のササが一斉に開花し枯れてしまったからです。これらは祇園祭のちまきの原料となります。しかし、普通なら回復してくるはずのササが、近年異常に増えた鹿に全て食べられてしまって復活せず、ちまきの生産が危うくなっているそうです。鹿が近寄らないようしている場所だけにはササが復活しているのですが、それ以外のところは完全に食べられてしまいます。通常のササの復活のサイクルが破綻してしまっているわけです。人間が自然をコントロールするなど傲慢なことを考えても簡単ではないことがわかります。

この後、研究をされている人に聞いてはいけない一言をあえて聞いてみました。「この研究が何の役に立ちますか？」「何の役にも立ちません。でも、おもしろいじゃないですか。研究とは本来そういうものじゃないですか。」とお答えになりました。しかし、私たちには人間と自然の関わり方という、今一番必要な研究をされているように感じました。

企画・取材・記録 村山(山本)敬子・大八木一寿
撮影・起稿・編集 河岸勝弘

